

リーディング・カンパニーシリーズ住友電気工業 (Google e ブックス)

長谷川誠二, 松尾聡子, 山口敦, 出版文化社, 2008 - 207 ページ

業界屈指の技術力で世界へ、400年のDNAが進化を続ける。トップ取材、社員インタビュー6人掲載。写真約40点、図表約20点。使える企業情報源、採用関連情報。人気専門家による企業・業界評価も収録。



p.67 住友電工の歴史を画した年

北川社長が「当社の歴史の上で一時代を画した年」と位置づけたのが、1961年だった。

その第一の理由として、北川は名実ともに先進的な設備と能力を備え、国内でも有数の規模を誇る横浜製作所の完成、第二の理由として伊丹製作所における特殊金属線、粉末合金など非電線部門の工場、施設が完成したこと、コンピュータの導入によって全社的な総合経営計画の立案が可能になったことを挙げた。

また、PEX（架橋ポリエチレン）ケーブル、ハネメット線、電子冷却素子を使った製品、ステンレス鋼線、ミリ波導波管と多層撚り同軸ケーブル製造設備、ピアノ線の連続試験機、イゲタロイの自動研削機など、新製品や独自の考案による新設備のほか、鳴門送電線架橋工事やブラジルの製鉄所におけるOFケーブル（内部に絶縁用の油を注入し、電気の絶縁性を高めた超高压送電用ケーブル）敷設工事なども取り上げ、いずれも住友電工にとって「誇りある出来事」であることを強調した。

このうち鳴門海峡を横断した送電線架線工事は、アドバルーン（気球）を使って送電線を渡すという世界でも初めての試みが注目を集めた。この工事は1961年6月に行われたもので、淡路島の門崎につくった大鉄塔下から直径9ミリメートルのワイヤーを船が、鳴門のうず潮が逆巻く中を対岸（四国側）の孫崎に向かって出発した。

七十七個のアドバルーンが取り付けられたワイヤーは、鳴門海峡の空にふわりと浮かび、二時間後には孫崎に到着して工事は無事に成功した。奇抜といえば奇抜だが、なんとしても送電線を架けるといふ技術者たちの意気込みが伝わってくるような工事風景だった。

.....

戦前から受け継がれている技術重視の姿勢

ところで住友電工の「歴史の上で一時代を画した年」は、同時に「技術の住友電工」を強く印象づけた年でもあった。アドバルーンを使って送電線を架ける工事は、見た目にはいかにも派手で、ともすればそのことだけに捉われてしまいがちだが、こうした工事は高いレベルの架線技術の裏付けがないと実現できない。そこには技術的な達成を重視する住友電工ならではの姿勢と、それによってもたらされた成果を見ることができる。そして、これらの技術重視の姿勢は、戦前から受け継がれているものなのである。